

姉を求めて

yusuke5831

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、過労死してしまった主人公苗川 紅夜。そして気まぐれに異世界に転生され、一緒に病死した姉も転生していると聞き、姉を探す旅を始める。

果たして、主人公は無事に姉を見つけられるのだろうか!?

目次

プロローグ	1
転生した先で	11

プロローグ

「ふう……この依頼も完了だな」

そう言つて俺は、持つていた銃を下ろす。確かこの依頼の金額は100万だったか？
まあ、いいか。さっさと報酬を受け取つて帰るか。

そう言つて俺は、ホテルに歩いていく。そういえば、自己紹介がまだだったな。俺の名前は、苗川^{なえかわ} 紅夜^{あかや} 年齢は17歳、職業は何でも屋といったところか。ちなみに今回の依頼は、議員の暗殺だ。とても簡単な仕事だったよ……警備が全くできてないからすぐに殺れた。全く、警備するならちゃんとしろつての。

そう思いながら歩いているとホテルに着き、依頼人から報酬金を貰い、金の入ったトランクケースを車に乗せ運転席に乗り車を発信させる。無免許なのは秘密だ。そして銀行で通帳にお金を入れ、また車に乗り暫くして家に着いた。車を車庫に入れて鍵を掛け、扉の鍵を開けてドアを開ける。

「ただいま」

そう言いながら靴を脱ぎ、家へ上がる。そうすると奥からおかえりという声が聞こえてくる。それを聞くと奥の部屋まで歩いていき、ベッドで寝ている人物に声をかける。

「姉さん、調子はどうだい？」

俺はそう聞くと、姉さんはベッドから身体を起こしながら、

「紅夜のお陰でお姉ちゃんはこんなにも元気なんだから」

そう言つて、俺に元気だとアピールする。

「駄目だよ、寝てなきや！」

俺はそう言つて姉さんをベッドに寝かす。

「いつもごめんね、私が働けさえすれば紅夜は学生生活ができたはずなのに……」

「いや、病気ならどうしようもないじゃないか」

俺はそう言つて姉さんを励ます。

「私、本当に紅夜のお世話になりっぱなしだなあ……これじゃあ紅夜のお姉ちゃんとして申し訳ないよ……」

そう言いながら姉さんの声が震えている。それを聞くと俺はこう言った。

「そんな事ないよ！ 両親が事故で亡くなつてから姉さんはずっと俺の面倒を見てくれたから……今度は俺が姉さんの面倒を見るんだ！」

「それに……好きな姉さんの為なら俺は何でもやるさ」

実は、俺と姉さんの血は繋がっていない。俺は小さい頃、前の両親に捨てられたらしい。それで、捨てられていた俺を見て、この家の両親に拾われた。だから義理の姉とい

うことになる。俺は、この家に来てから姉の優しさに依存しまくった。

そしてとても恥ずかしい事だが、この家で過ごしているうちに、俺は姉さんの事が異性として好きになっていった。そしてある日、何か自分の中で狂ったのか姉さんに告白をした。すると姉さんは、

『こんな不束者ですが、宜しくお願いします』

とこう言ってきた、つまりOKということであつた。なんで了承してくれたのかもわからず、理由を聴くと、

『だって紅夜つて可愛いし、私も好きだからかなっ?』

と返ってきた。それを聞いた俺は卒倒したが。

まあ話がずれたが、俺は姉さんの為ならなんでもする。それが例え、悪い事だろうと

……

俺がそう考えていると、姉さんがこう言ってきた。

「そういえば、お腹すいてきちやつたな」

「なら急いで用意するよ」

そう言つて、厨房へと向かう。今日は姉さんの好きなハンバーグにしよう。そう思いながら冷蔵庫を開ける。

「お待たせ、今日はハンバーグにしたよ」

そう言ってできたハンバーグを姉さんの所まで持つていく。

「ハンバーグなんて久しぶりね」

「そうだね……ほら、出来立てのうちどうぞ」

そう言いながらハンバーグを切り分けて、一切れをフォークに刺し、

「あ〜ん」

そう言いながら、姉さんの口元まで運ぶと

「あ〜ん……んっ……やっぱり紅夜の作ったものは美味しいね」

そう言いながらどんどんハンバーグを食べていく。そしてあつという間に綺麗に無

くなつた。

「ご馳走様でした」

「はい、お粗末さまでした」

そう言つて、俺は空になつた食器を洗いに持つていく。そうして食器を洗い終え、姉さんのところに戻る。

「ねえ紅夜、私の病気はちゃんと治るのかな？」

姉さんがそう俺に聞いてきた。

「大丈夫さ、あと少しで姉さんを治す事ができるから」

そう、姉さんを治す為に必要な額は2億5千万円いる。だが、後、1千万で姉さんの病気を治すことが出来る。そうすればあの頃みたいな日常が過ごせる……

俺がそう思っていると、いきなり姉さんが咳き込み出した。

「げほっ！げほっ！……」

「姉さん!? 今、薬を……」

そう言つて急いで薬を取りに行こうとすると、腕を姉さんに掴まれる。

「いいのよ……もう私は助からないんだから……」

そう言つて俺の手を離さない。

「姉さんっ……っ！」

「男の子が泣かないの……げほっ！げほっ！……」

そう言いながら姉さんがまた咳き込む。そして

よく見ると手に血が付着している。

「ほら……こんなんじやもう無理だよ……」

必死に声を出しながら俺に自分はもう無理だと言ってくる。

「私、諦めてたの……紅夜とこんな風に愛し合うの」

「義理だといつても……弟を愛しているなんておかしいと思った」

「けれど、あの時紅夜が告白してきてとても嬉しかったんだ……」

「それからの日々はとても楽しかったなあ……」

「こんな終わり方だけど、紅夜と一緒にいた日々は楽しかったよ」

姉さんが続けてこう言う。

「こんな私と一緒にいてくれてありがとう」

そう言ううと握られていた手の力が弱くなり、腕がガクンと垂れる。

「うっ……嘘だっ……姉さん、起きてよ……？」

そう言うって姉さんの身体を揺らす。が、全く反応がない。

「冗談はやめてよ……ねえ……姉さんったらっ！」

そうして叫んでも全く姉さんに反応がない、しかも段々冷たくなっていく。

「つ……うわああああああつ!!」

俺は叫びながら姉さんを揺らす。

「嘘だつ!嘘だつ!姉さんが死んだなんてつ!嘘だああああ!!」

俺は泣きながら、床を叩く。

「俺は……これからどうしてつ……生きていけばいいんだつ!」

俺は生きる希望を失った。姉さんという希望を。これから何をしていけばいいのだろうか。どうすればいいのだろうか。

そう思いながら立ち上がろうとしたとき、物凄い眠気と目眩に襲われる。

ああ、そういえば最近睡眠を取らずに仕事をし過ぎたのかもな。

そう思っているうちにどんどん眠くなっていく。ああ……なんだか、このまま眠れば姉さんに会えそうな気がする。

「それじゃ……おやすみ、姉さん」

そう言つて、俺は深い眠りに着いた。

「この姉弟は……」

とても真つ白な空間で1人の男性がこう呟いた。

「なんだかとても可哀想です……」

もう1人の女性がそう言う。

「あまりにも報われなさすぎですよ……」

そう言つて女性が涙を流す。

「なら、お前ならどうする?」

男がそう言うとながが立ち上がり、こう言つた。

「勿論、二人共転生させて、一緒に暮らしてもらいますよ!」

それを聞いた男は何かを思い付いたような顔をしてこう言つた。

「そうだな、二人を転生させるか」

そう言つて男は立ち上がり、別の場所に歩いていく

「あの人にしてはやけに素直ですねぇ……なんだか嫌な予感がします」

そう言いながら女性は男の後を付いていく。

「さて……少しは退屈しのぎになりそうだ」

そう言いながら男は水晶玉を持ち上げると、地面に叩きつけた。

「さあ、不幸な姉弟は別の世界で出会うことができるのかな?」

そう言つて男は椅子に座り出した。

「全く、こんな事だろうと思いましたよ」

　そう愚痴を言いながら女性は、準備をしていた。

「とりあえず、状況を教えるための手紙と此処で使わなかったお金の換金つと……あつそれから今度こそ病気等死なないようにお祈りを……」

　そうして女は色々準備が終わった後に、姉弟の元到手紙とお金が入った鞆を傍に転送する。

「私は、2人が今度こそ幸せになれるように応援します！」

そうやって彼女は心から2人のことを応援していた。

転生した先で

「……………」

………何かが聞こえるような気がする。いや、俺の気のせいか。なんせ俺は死んだのだから。お陰で身体が浮いている気分だ。

「おにい……………」

やはり、何か聞こえる。もしかして死後の世界とやらに着いたのか？

「お兄ちゃん起きて！」

俺の近くでそう言われ、思わず目が覚める。

「あつやつと起きたね、お兄ちゃん！」

そう言いながら、何故か俺のことをお兄ちゃんと言ってくる少女がいた。なんだこいつは……………？と俺はそう思いながら身体を起こす。

「早く着替えて、お父さん達のところに行きましよう！」

お父さん……………？何を言っているんだ？ 俺の父さんは交通事故で亡くなった筈だが？

そう思っていると、少女が「はーやーく！」と急かしてくるので、取り敢えず少女を

部屋から出して着替えをしようとするが疑問が浮かぶ

「……俺はこんな服を持っていたか？」

スーツみたいなのもあれば、日本では見られないような服もある。そして極めつけは、この部屋だ。

俺の部屋はこんなにも広くはなかったし、家具もこんな高そうなのは置いてなかった。それでは違う家ということか……？ いや、これだけ部屋が広ければそれだけ家もでかい筈だ。そんな家は俺の近くでは見なかった。

そして最後はあの少女が俺のことを『お兄ちゃん』と呼んでいた事だ。普通は見知らぬ人ならお兄さんかおじさんだ。もともと、俺はおじさんという歳ではないが。

そしてあの少女のスキンシップ。あれは見知らぬ人にするのではなく、身内や兄妹等にするような……

俺は常に思考しつつ、恐らく正装であろうスーツを着る。出ようとする前に机に手鏡が置いてあった。恐らくあの少女のものだろう。そう思いながら手鏡を見ると

「……えっ？」

不意に声が出てしまった。何故なら鏡に映っているのはよく知っている自分の顔ではなかったのだから。

髪は金髪で瞳の色は琥珀色、そして顔は整っている方……少なくとも、俺の見た目に

何一つ一致しない……どうなっているんだ!? ……まさか俺は転生と言うやつをしたのか?

俺がそう思っていると、

「お兄ちゃんー!早くしないとお父さん達に怒られちゃうよー?」

廊下から、少女の声がドア越しから聞こえる

「ああ……今行くよ」

そう言つて俺は扉を開け、部屋を出て少女と一緒に廊下を歩く。すると妹が何かを考え出す。

「うーん、おかしいなあ……」

「何がおかしいんだ?」

「いつもはとつてもうるさいのに今日はとても静かだと思つてー」

……しまった、元の奴はそんなにおしゃべりなのか。

「……いや、気にすることは無いさ」

と俺は言うが、

「なんかお兄ちゃんがそんなだと調子狂うなあ……」

そんなに元の奴はうるさいのか……

そう思いながら妹と話していると、リビングへと着く。

すると椅子には一人の男性が座っていた。恐らくあれが父さんなのだろう……
そう思っていると、

「お父さん、おはよう！」

「おはよう、ユウナ」

そう言つて2人は挨拶をしていた。成程、妹の名前はユウナか。

俺はそう思いながら、俺も挨拶をする。

「父さん、おはよう」

「おはよう、ハヤト」

父さんから挨拶が返ってくる。そしてこの身体の名前は隼人というのか。

そう思っていると、恐らくキッチンであろうところから女性が皿を持って出てくる。

「ほう、今日はサンドイッチか」

父さんがそう言うと、

「ええたまにはいいと思つて」

「母さんが作る料理はなんでも美味しいからな」

「ふふっありがたうお父さん」

と父さんと母さんがイチャイチャし始める。そうすると妹が、

「もう、早く食べようよ！」

「ああすまんすまん」

「それじゃ、いただきますしようか」

母さんがそう言うのと、皆で手を合わせて、

『いただきます！』

と言い、皿にあるサンドイッチを手で掴み食べる。……おいしいな。

そう思っていると、妹が美味しいと言ってサンドイッチを食べていた。

そして、自分の分を食べ終わったのか俺の方を見る。俺は、皿にまだあるもうひとつのサンドイッチを差し出す。すると、妹が俺にありがとうと言いながら食べ始める。

「ハヤトが朝からそんなに食べないなんて珍しいわね」

と母さんからそう言われた。まずいな元の身体の奴は朝から多めに食べる奴だったか。

「……今日はそんなにお腹が空いてなかったんだ」

そう言うって誤魔化すと母親は「あら、そう？」と言ってあっさり信じてくれた。

「ご馳走様でした」

俺がそう言うのと、椅子を立ち歩いて自分の部屋に戻る。そうして部屋に着き扉を開けてベットに座りながら考える。

「誰かはわからないが、何故俺を転生させたりした……？」

生憎、俺はラノベ等でよく見るトラックで跳ねられたわけでもなく、神の不手際で殺された訳でもない。更に、俺は善人ではなく、悪人の方だろうに。

自分の欲姉の為ならどんな事もしてきた。たとえそれが人殺しであっても。そんな俺を転生させて何になる？ 今までの事は忘れてまた1から始めるとでも？ ははっ……そんなの出来る訳ないだろ……姉さんの事なんて忘れるなんて……

「クソツッ！ 一体何で俺はこんな所につ！ あのまま死んでた方が姉さんと父さんと母さんと一緒に暮らせたかもしれないじゃないか！」

俺はそう言うが、悪人が天国に行ける訳無いかと思うと笑いが出てしまう。

「誰か教えてくれよ、俺がこんな所にいる理由を！」

「では、私が教えましょう」

俺がそう言うのと、後ろから女性の声が聞こえる。振り向くと、銀髪でとても綺麗な女性性がいた。……さっきまでは、人の気配も感じなかった……それなのに、いきなり出てきて俺の後ろに居るなんて何者なんだ？

「すみません、自己紹介が遅れました。私の名前はエリアと言います」

俺がそう思っていると、女性が自己紹介をしてきた。

「ああ……俺の名前は」

俺も自己紹介しようとする、女性に止められる。

「いえ、既に存じてします。……苗川赤也さん」

女性はそう言つて俺の名前を言う。……こいつ、前の俺の名前を……っ!?

俺の名前を言われて思わず身構える。

「身構えなくても私は別に何もしませんよ」

エリアはそう言つて両手を挙げる。

「なら、お前は何しにここに来た?」

「だから貴方が悩んでいたことを教えてあげると言つたじゃないですか」

そう言つてエリアは、にこりと微笑む。こいつ……俺の何を知ってるんだ。

「無論、何でも屋をしていたことや姉の為に手段を選ばなかったことも知っています」

エリアはまるで俺の心を読んだかのようにそう言つて来た。

「……お前、人間か?」

思わず、俺はそう言つてしまう。するとエリアは、

「私、こうみえても女神なんですよ」

と言つてきた。冗談きついな……だがしかし、女神なら心を読むことも、気配を消し

て俺の後ろにいることも余裕で出来る。

「意外と信じてくれるんですね?」

「……まあな」

否定できるところがないしな。と心の中でそう思う。

「……それで、教えてくれるんだろ？ 俺を転生させた理由を」

「いいでしょう、それでは教えてあげます……では、頭を出して下さい」

俺がそう言うのと、エリアが頭を出せと言ってきた。……何をやる気だ？

「言葉で話すより、直接頭に情報を入れた方が早いでしょう？」

「……そうだな」

そう言つて俺は、その場にしゃがみ込む。すると頭の上に手を置かれ、一気に情報が頭の中に流れ込む。

俺を転生させた理由や、俺だけでなく姉さんも転生させていること。それ等を理解すると、置かれていた手が離れる。

「……成程、大体わかった。つまりあんたは俺達に幸せに生きて欲しいと」

「……そうです、私はあなた達を見てとても可哀想だと……」

「余計なお世話だ、誰がしてくれと頼んだ？」

俺がそう言うのと、エリアは怯む。

「でも、私は……！」

「俺達は頼んでもないのに、こんな事をして満足か？ 救った気になつたのか？」

「所詮、お前がやっていることは偽善だ」

俺がそう言うのと、エリアは黙っていた。

「……だが、転生したからにはこんな事を言っても意味は無いか」

俺はそう言つてベットに横になる。

……言葉では言えないが、少しばかりは感謝している。もう一度姉さんと一緒に暮らせるといふ事に。やれやれ……さつきまでエリアにあんなことを言つてたのにな。

俺がそう思っていると、さつきまで目に涙を浮かべていたエリアが少し微笑んでいゝる。……そういや、心を読めるんだつたな。

俺がしまったなと思っていると、エリアが渡すものがあつたと言いながら黒いケースを差し出してきた。俺はそれを受け取り、ロックを外して、中を見るとボルトアクシヨン式の狙撃銃であるFR—F2と自動小銃のS&W M39等色んな銃が入っていた。

「これは……？」

「もし襲われたりした時に自衛手段がなければと思ひまして、それに銃の扱いは慣れていゝるでしょう？」

俺がそう聞くとエリアはこう言つてきた。その答えに思わず苦笑してしまふ。

「そーういや姉さんは何処にゐるんだ？」

「……何処か遠くのところにいるみたいですね、残念ながら私は教えることは出来ないんです」

俺がそう聞くとエリアはそう言うてきた。そこは自分で探せつか？ お前の上司もなかなか粋なことをする。

俺はそう思いながら、エリアに聞きたいことがあったので聞いてみる。

「それで、姉さんを探す為にはどうすればいいんだ？」

「貴方の姉さん……千夏さんを探す為に旅に出れば良いでしょう。ここの文化として15歳になれば大人になる為に4年間は旅に行けるらしいですし」

「つまりはその時に探せということか」

「今、貴方の肉体は13歳ですので2年後ですが」

……2年後か、その間に銃の練習とかしておかなければな。

「まだここには銃というものは無いので使う際は気をつけてくださいね」

俺がそう思っているとエリアがそう警告してくる。ダガーナイフ等も練習しておくか。

「それでは、この石を渡しておきますのでこれを握りながら心の中で私を呼べば何時でも私と会話できます」

そう言うってエリアは俺に水晶のように透き通った石を渡してきたので俺はそれを受け取る。

「応援しているので頑張ってください」

そうやって俺の目の前からエリアが消える。天界に帰っていったのか。そう思いながら俺は再びベットに横になり今後のことを考える。

姉さん、今は待つてて必ず会いに行くから。

俺はそう思いながら、意識を手放した。